

浄

monthly
JÔDO

土
12

2003 December



法然上人鑽仰会

月刊

浄土 もうすぐ 800 号

特別

企画 [表紙ライブラリー]



昭和35年4月号



昭和35年5月号



昭和35年6月号



昭和35年7月号



昭和35年8月号



昭和35年9月号



昭和35年10月号



昭和35年11・12月号



昭和36年1月号



昭和36年2月号



昭和36年3月号



昭和36年4月号



昭和35年5・6月号



昭和36年7月号



昭和36年8月号



昭和36年9月号

法然上人鑽仰会

浄土

2003/12月号 目次

法然の苦しみ 遊蓮房門照に遇う	福永覚成	2
沖縄の袋中上人	御代英資	8
梵字⑥	真野龍海	18
表紙のことは	永井健策	21
会いたい人 北村和夫②	関 容子	22
代替医療という世界⑧	井上朝雄	30
響流十方	小村正孝	32
連載 法然上人をめぐる人々	石丸晶子	36
Jフォーラム		43
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ『さっちゃんねッ』	かまちよしろう	47
編集後記		48

表紙題字=浄土門主 中村康隆 祝下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎



法然の

苦しみ

遊蓮房円照に
遇う

福富覚成

法然は年来研鑽した黒谷を出て嵯峨釈迦堂に参籠した。

この釈迦堂の釈迦像は「生身の釈迦如来」として知られ、京都は勿論、関西・近畿地方からも多くの参詣者で賑わい、庶民にとって心のよりどころとなる霊場であつた。

法然は釈迦像の前で虐げられている庶民の愁い、悲しみ、悩みの声を身近に聞いた。彼等は呻吟しながら救いを求め、祈願しているのだつた。法然はこの庶民の悲痛な声のなかで、自分は今、彼等に何を成すことができるか自問した。そして途方に暮れた。それは全く為す術を知らなかつたからだ。法然の修めてきた既存の仏法のなかには、凡夫救済の道は全く説かれていなかった。所詮は菩提心を起し、三学を修める以外に苦悩からの解脱の道を学んでいなかった。

法然は釈尊の前に跪伏して、この哀れな庶民がこのままで救われて行く道を我れにお示し給えと、涙しながら祈願するのだつた。

法然は凡夫救済という切実な問題を抱えて南都へ向かつた。そこにいる名だたる学匠のなかに、法然の求めている問題に答えてくれる人物がいることを期待してのことだつた。しかし訪ねたものの、誰からも何も得るものはなかつた。相手を論破するだけだつた。武芸者が他流試合をしたようなものだつた。そして他方、このことは実は法然がもくろんだ意図通りになつた。叡山では法然を智慧第一と衆徒が認めるところとなつたのだ。

法然はこの旅のなかで、永観、珍海の遺した書物に出合い、わけても善導大師の著書五部九巻を手に入れることができた。これは何にもまして旅の成果であつた。法然の心は躍つていた。足は叡山へ向かつて歩いていった。時は保元元年、法然二十四歳であつた。保元の乱が起きて京都の町は騒然としていた。法然は急ぎ黒谷に帰り、善導の五部九巻の書を机上に置き、震える手で観經の疏のその頁をめくつた。項目を見て、善導の観無量寿經の

受け取り方に感動した。自分の求めていたものに出合ったような気がした。しかし、次第に読み進むうち、法然の心は落ち込んでいった。

善導が観經の疏で強調しているのは、念仏によつて凡夫が報土に生まれることである。その救いの対象も凡夫である。その凡夫が生まれるために、阿弥陀仏は西方極樂浄土を建立したというのであった。善導の観經のこの読み方に法然は感涙した。しかし読み進むうち、その行において善導が、散善義のなかで浄土往生の正因を、観經で説く上品上生の三心を具足することが、念仏する者の心構えとしていふことに、法然の心は暗く沈んでいった。観經の上品上生には念仏は説かれていない。説かれているのは下品上生からである。なのに何故念仏の心構えに三心を具足しなければならぬのか。庶民は上品ではない。下品下生である。その悪人に対して、極樂往生のために三心を具足して念仏せよといえ

ば、念仏は庶民と無縁のものとなつてしまふ。善導の解釈に法然は得心がゆかなかつた。

また浄土三部經を拝読しても矛盾に満ちていた。阿弥陀仏の本願は、現実に悲痛している三学非器の悪人である庶民を目当てにしているはずだ。なのに十八願文には「唯除五逆、誹謗正法」と庶民は切り捨てられている。何故なのか。第十九願、第二十願文においても、法藏菩薩の誓願に照らしてこれを論理的に解釈すれば、既存の仏道になり、庶民は全く近寄れないものになつてしまふ。法藏菩薩は上品の者のためにだけ誓願を立てられたのだろうか。いや違ふはずだ。無量壽經に説かれている、成就された阿弥陀仏の四十八の誓願は、一つ一つが凡夫救済のまことであるはずだ。いや、なければならぬ。未だにまこととして受け取れないのであつた。一体何処にまことの糸口があるのだろうか。法然の苦悶は一通りではなかつた。幾度となく観經の疏の智慧を借りて、三部經の説く阿弥陀仏の衆生救

済のみ心を掴もうと焦っていた。

しかし、そこには見いだせなかった。

2

保元二年になった。叡空の室に法蓮房信空が入門した。信空は法然が「浄土の法門と遊蓮房に会えることこそ人界に生まれたる思い出に侍れ」と述懐している遊蓮房の甥であった。遊蓮房の父は少納言藤原通憲であった。この人は出家名を信西といい、後に三百四十七年間絶えていた死刑制度を復活させた。後白河天皇を立て権勢を振るい、保元の乱の首謀者藤原頼長の墓を暴いて、死刑囚としてさらした。乱に加担した源為義をはじめ七十余人の死刑を敢行した。平治の乱で信西も敗走中捕らえられ首をはねられた。その首は加茂の河原にさらされた。信西の首をはねた源義朝も平清盛に敗れ家臣に裏切られ、あえなく殺された。これはすべて平清盛の工作に依るところだった。まさに世情は骨肉相争う末法

の世を呈していた。

連座の流罪から帰還した遊蓮房円照は、かねてより智者として名を馳せている法然に遇いたくて、信空のいる黒谷の房を訪ねてきた。信空は兩人を引き合わせた。まったくの初対面であった。しかし法然は初対面なのに、何処かで遇っているような気がしていた。お互いの心が解け合うのを感じ、十年來の知己のような懐かしさを覚えた。円照も同じ思いであった。

円照は幼少の頃から仏道に興味を持ち、十代にして法華經を暗誦していた。授戒を受け、天台摩訶止観の行と恵心流の観念の念仏行も併修していた。また彼は天台小止観の行法によつて自己の感情を波立たせない透徹した見識を持っていた。彼の回りは匂うような氣品と温かさで満ちていた。

法然は父信西の非業の死の悔やみを述べた。円照はお礼を言った。

「御房の暖かいお心遣い有り難く存じます。

父上には数え切れないご恩を受けながら、何一つお返しすることができなかったことを残念に思っています。更に申し訳ないのは、父の仕打ちによって義朝殿に父を打たせる業を作らせたことは、誠に申し訳なく幾度わびてもわびきれない思いで、み仏の前で懺悔をいたしています」と。

法然はこの言葉を聞いて雷に打たれたような衝撃を受けた。自分は身分こそ違うが、円照と同じく父を討たれた身である。父を討つた定明のことを思うと、未だに憎しみが湧いてくる。円照の大きさ、おおらかさに低頭の外なかった。

円照との法談のなかで、話は観經の疏のことに及んだ。円照はまだその疏を拝読していなかった。円照は無量壽經の唯除五逆の文、感無量壽經の定善の三福のことなど、法然が今行き詰まっていることを尋ねてきた。法然は御房と同じように疑問を抱いて苦悶していると答えた。

「御房はきつとこの疑問を解いて下さるに違いない。私にはそれがわかりません。その折りには広谷にお越しいただき私をはじめ、広谷にいる多くの念仏聖達をお導き下さることを期待しています」と言って辞していった。

法然はこの円照との出会いで心の中の固まりが氷解して行くのを覚えた。念仏門立の手がかりを掴んだような気がした。

その手がかりとは懺悔心であった。「善導大師の観經の疏を貫いている大師の本意も懺悔心であった。このことは観經の疏を手にしたときから理的にはつかんでいた。しかれども如来という全き鏡の前で、自らの身口意の三業にわたって清浄になることは、容易の業ではなかった。今その手がかりを円照が示してくれた。

法然は父母のことを思っていた。観無量壽經の「仏心とは大慈悲是なり」の經文が浮かんできた。まさに父母は今日の自分を支えてくれている慈父慈母であった。更に観無量壽

經のなかには「彼の国に生まれんと思わん者は三福を修すべし。一つには父母に孝養をつくすべし」の文を思い出した。法然は改めて父母から受けた大恩を思い涙がこぼれていた。み仏の鏡の前で、三業を清浄にすることはできなかったが、父母の鏡の前では自己を調べることは、身近であり具体的にできることだった。法然は未だ定明に対して懺悔する心は起きなかった。法然にはお粗末な自己が見えてきた。善導の觀經の疏の至誠心の解釈に「至とは真、誠とは実なり」とある。また云う「外に賢善精進の相を表し、内に虚仮を懷くことを得ざれ」と、定明に懺悔できない自分の心こそ、内に虚仮をいだくことで

はなかったか。法然は自分の心のなかに、真実にそむく虚仮の心を発見した。善導が念仏の心構えとして、三心を取りあげた心がわかりかけてきた。

法然は最も身近な父母への深い内証の世界に没入していった。やがてそれは阿弥陀仏のみ心と団体になる道であった。

法然と円照との出会いは、阿弥陀仏の導きに他ならない。この円照との出会いがなかったら念仏は独り立ちできなかった。

法然はこのことを「浄土の法門と遊蓮房に会えたことを、人界に生まれた思い出に侍れ」と述懐したのだった。

求道の後半生

沖縄の
袋中上人

御代英資

袋中研究家・日本アイアール(株)相談役

慶長一一年（一六〇六）、滞琉滿三年になつていた五五歳の袋中は、宿願であつた渡明を断念したとき、次のような絶句を残している。

那覇ノ夜ノ雨

東西南北、風二信^{ふたに}テ行ク

船ヲコノ圻^{はら}ニ止ムレバ波濤^{はとう}平ラカナリ

古郷ヲ憶想スルコト宵^{しよ}夕切ナリ

涙、細雨トトモニ深更ニ至ル

ここに書かれている「古郷」とは、袋中が前半生を送つた郷里の岩城（福島県いわき市）であつたのか、それとも神と佛の習合する大和（日本）であつたのであろうか。

袋中は琉球から帰国して一八年後の寛永元年（一六二四）に、『南北二京霊地集』二巻を書き終えている。この著書の上巻には大和・大峯・熊野にある三五の神社縁起が、下巻には京都を中心とした四五の神社縁起が収録されてある。袋中は十数年という歳月をかけて、これら大社名刹を巡り、各神社の縁起を集めたのである。

この『南北二京霊地集』の執筆の動機は何であつたのか。袋中が琉球に持参していた書物は、名越派総本山である大澤（栃木県）円通寺で学席を勤めていた若いころ、自筆抄録の『神道集略抄』だけであつた。

滞琉中に執筆した『琉球神道記』には、この『神道集』が随所に引用されている。しかし、この『神道集』の大社縁起は関東地方に偏り、熊野権現をのぞくと南北二京の大社は皆無である。袋中は『琉球神道記』を書きながら、『神道集』と一対をなす『南北二京霊地集』を構想し、神佛習合の日本佛法説話を集大成しようと考えていたにちがいない。

そうであつたから、琉球から帰国した袋中は郷里に戻ることなく、京都・奈良・南山城を巡りながらの求道の後半生を終えたのである。

京都時代（五六〜七〇歳）

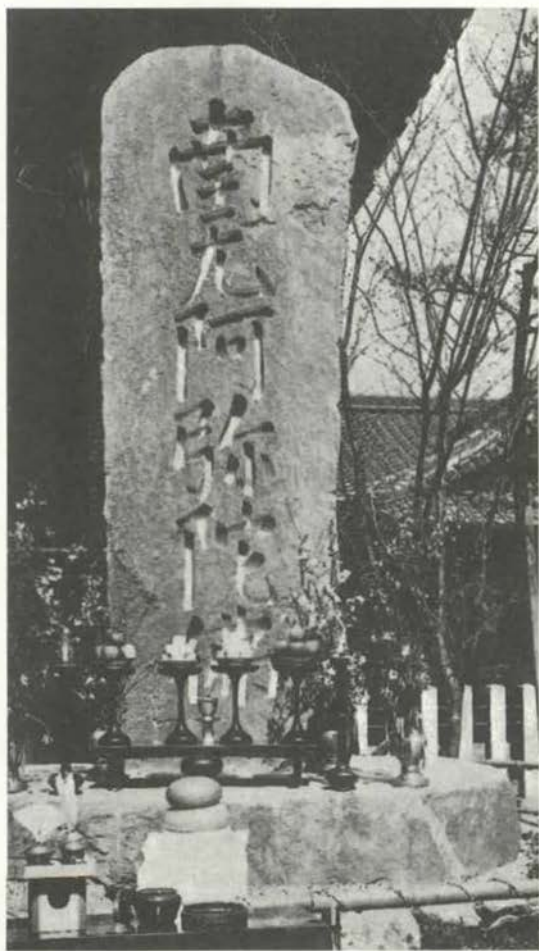
慶長一四年、京都・大山崎の大念寺で『琉球神道記』の清書を終えた袋中は、その後、二年にわたり伏見城下で布教に専念していた。慶長一四年は薩摩軍の琉球攻めに破れた尚寧王が、虜囚として鹿兒島に軟禁され、島津家久に伴われて屈辱の江戸上りをした年である。

江戸上りの尚寧王一行は、大坂から川船で伏見の河港に到着した。袋中は伏見城代松平定勝（家康の異父弟）の側近くで尚寧王一行を迎えたであろう。この二人の機縁は不明であるが、定勝は袋中に帰依し、五人扶持を寄進している。この定勝の口添えもあつたのであろうが、袋中は薩摩藩の許しをえて、尚寧のもとに伺候したにちがいない。

戦いに敗れた琉球の国運は、もはや国王たる自分の意志の及ばぬものとなつてしまつた——という悲痛な思いに沈んでいた尚寧は、袋中との短い語らいの中で、いかなる苦難や屈辱にもめげず、自分の帰国を待つ島民とともに生き抜こうと決心したのである。

尚寧が帰国前に薩摩から袋中に贈つた自画「袋中上人像」の四言四四句からなる画賛は、袋中への帰依と、この時の追慕の念の深さを物語っている。

慶長一六年、京都に出た袋中は町衆の寄進を受け、三条橋の際に草庵を結んだ。『袋中上人絵詞伝』によると、当時の所司代板倉周防守は松平定勝の勧めによつて袋中を知り、「聞きしよりもみるにまさりて、道容の殊勝におはしければ、浄土の法要などこまごま尋（ね）聞て、渴仰の思ひ浅からざりしとなむの間柄となつたようである。それから道俗貴



袋中上人筆名號碑

一基

當山本堂前

當山に蔵せる袋中上人大名號は、紙本長一丈三尺の彫大なる掛幅にして、普通にては掛けて拜覽することを得ざるを以て、當山主良哉都尚之を悲しみに、計らずも洛北白川にこの名號を彫刻するに足る一大巨石を得、一昨昭和十一年發願し、この大名號を原形通り、その巨石に彫刻し、本堂の東側に建設したるものにして、堂々たる大伽藍の前に二十尺に近き一大巨碑を見上る時、崇高の念一段と湧き出づるを覺ゆるなり。

賤が日々に雲集し、ついに草庵を堂宇に造営したのが今日の槽王法林寺である。

この法林寺で袋中は『当曼たいまん（当麻曼陀羅）白記びやくき』全一一巻の大作を執筆している。浄土宗において初めて当麻曼陀羅の注釈書『当麻曼陀羅疏』四八巻を書いたのは聖聡上人である。袋中は聖聡上人に敬意を表して、書名を『白記』としたのであろう。

袋中は『白記』を書くに当り、始祖法然上人の影像に誓い、善導大師の『観無量寿経疏』にのっとって、念佛布教に欠かせない絵解き説教本の決定版をつくろうとしたのである。その序文の中で、袋中は曼陀羅の功德を次のように述べている。

コノ曼陀羅ハ長夜ノ灯明ナリ。肉眼ノ者ヲシテ聖境ヲ見、頑癡ノ機ニ善縁ヲ知ラシム。
コノ故に厭離穢土ノ心忽チこゝろ二起リ、欣求浄土ノ業イヨイヨ進ム。

南都（奈良）時代（七一〜七二歳）

慶長一九年の大坂冬の陣は、その後の袋中の求道生活にも大きな転機を与えている。

念佛寺（奈良市漢国町）の由緒略記によると、家康は木津（京都府山城）の戦いに敗れて奈良まで落ちのび、漢国神社裏手の墓地「山の寺」にあった桶屋の棺の中にしのんで、命拾いをしたそうである。家康は大坂城を落したあと、異父弟の松平定勝に、九死に一生を得た地に一寺を建立するよう命じた。

家康の命を受けていた松平定勝は、佛道の師と仰いでいた袋中に、「山の寺」に建立した念佛寺の開山を願ひ出たのである。それは家康没後の元和八年（一六二二）のことであった。京都・檀王法林寺を高弟団王に託して奈良に移った袋中は、この念佛寺で特筆される偉業を残している。

そのころ浄瑠璃寺（京都府相楽郡加茂町）では堂宇修理のため、一切経を売却して修繕

費に当てようとしていた。この話を聞いた袋中は浄瑠璃寺に相当の金銭を贈り、一切経を譲り受けたのである。この一切経は想像以上に巻数の欠けたものであった。袋中は自分で欠落部分の經典を書写するという苦辛惨憺のすえ、ついに完全な一切経をそろえたのである。

當時は天海による木版活字の大藏経が出版される以前であり、一切経を入手することは大変に困難な時代であつた。この一切経の収集作業は、念佛寺経藏の棟札によると、寛永二年（一六二五）、袋中七四歳の正月から同六年までの四年間にわたつてゐる。

袋中の収集補正した経巻には「一校袋中」と校合の証しが墨書されてあるが、この古経は残念ながら早くに散逸してしまつた。後世、養鷗（がう）徹定上人によつて集められた五部のみが、京都・知恩院に所藏されているそうである。

瓶原・飯岡時代（七三〜八八歳入寂）

この一切経の収集補正をほぼ終えた袋中は、一所不住の信条を守り、またも奈良を後にした。『絵詞伝』の詞書（ことばがき）には、次のように書かれてある。

上人七十二歳の冬、城州相楽郡西尾九躰佛の辺に住居し給ひけるに、同郡瓶原といふ所に天神の客あり。寛永元年正月廿五日より、上人十七日の間參籠ありけるに、和光の方便にや、この社のわたりに草庵をむすび、朝夕神に詣でて法味を捧げばやとおぼしければ、（中略）今の瓶原心光菴これなり。

浄瑠璃寺から北に向つて山を下りると、木津川が流れ、川向うの海住山寺（かいしやんじ）の建つ山麓一帯を、昔は瓶原とよんでいた。この辺は八世紀の奈良時代に、五年間だけ恭仁宮があつたところである。

表我成備十方
此生攝我大千
下至十聲若不
生者不孔正覺

從佛令現在世成
佛當知本願量
願不虛與生福
念如生土矣

袋中上人自畫贊二祖對面圖

一幅

當山藏



袋中上人が二祖對面を描かれたことは數々のことにて、當山にもその畫幅二幅を現藏す、共に墨畫なり、今此幅は右方に善導大師を、左方や、下に元祖大師を圖し、上に善導大師の第十八願の釋文を書寫し、中央下に「袋中花押」と自書しあり、裏書は當山第八代東暉和尚が上人の滅後十年に當る慶安元年に書せしものなり。

心光菴の旧跡は恭仁神社に向う参道の左側にあり、現在は茶畑治いに数基の無縫塔を残すだけである。恭仁神社の社殿奥には、今も「天満宮正面」と刻まれた古碑が立つ。

『瓶原古今記』（二七四二年編）によると、『当曼白記』は、この心光菴で清書されたであり、このころの袋中は曼陀羅信仰を通して、その求道心は頂点に達していたようである。袋中の残した自筆の切紙には、次のように書かれている。

寛永二年丑三月廿五ノ食後ノ念佛シテ書テ云。三月十四ノ往生ヲ願トモ叶ハス。コレヲ悲ム。同一九日ヨリ禁籠七日シテ一百万遍ヲ唱テ。命終ノ年月日時ヲ定ルコトヲ祈ルニ、驗ナシ。廿五ノ曉。悲ナカラ念珠クリキタルニ。意ス落泪甚シ。

袋中にとつて三月一日は、永禄八年（一五六五）、一四歳のとき岩城の能満寺で、叔父の存洞上人から沙弥戒を授けられた日である。そして善導大師ならびに当麻寺の中將法尼の、また袋中の檀越であった伏見城代松平定勝の命日でもあったのである。これら結縁の佛たちと、袋中は俱会一處を誓っていたのであろうか。

この時から袋中は菩薩となり、和光同塵の言葉通り、あらたな念佛布教を始めたのである。『絵詞伝』の詞書には、次のように書かれてある。

寛永三年の春、彼岸の中日にあたりて、天神の社の辺へ、郡内の男女群集せり。上人六字の名号に、面々の汚名を書（き）加え、参詣の男女に一幅づつ手づから授け、鳥居の下、石段の上に立て、十念を授け給ひて、こまやかに厭欣の道理を勧策し、くわしく称名の功德を演説し給う。聴聞の人みな渴仰し、信伏せずということなかりき。

この名号は「瓶原名号」とよばれ、今も村野間に伝わっている。袋中と村人とは、いつしか喜びも悲しみも共有する間柄になっていたが、寛永一四年、

袋中八六歳のとき村から重罪犯が出た。処刑を言い渡した奉行所に、袋中は赦免を願ひ出たが、犯人たちは刑場の露と消えたのである。

化他利生に励んでいた袋中には、この事件は身を切られるような悲しみであった。主上を救済くさいできなかつた自責の念に耐え切れず、袋中は飄然ひょうぜんと木津川を船に乗り、次の歌を残して瓶原を後にしたのである。

いづみ川 雲井の空にながれてし

いま ゆくすえは風にまかせて

泉川は木津川の古称である。袋中は瓶原から三里ほど川下の岩場のつらなる砂浜で船をおりた。この岩場を支えとした丘陵地帯は飯岡とよばれる。

翌年の寛永一五年、丘陵の三つの峯に袋中は高さ五尺ほどの阿弥陀・釈迦・薬師の石佛三体を安置した。西の峰には阿弥陀佛を置き、弥陀感応の日である毎月一五日には、この阿弥陀山で袋中は村人に結縁の十念を授けた。

人生五〇年といわれた時代、八八歳の老衰し袋中は侍者に助けられて寺を出たが、西の峰の麓で恒例の十念を授けるのが精いつぱいであった。

袋中の遷化の様子は、直弟子東暉の『飯岡西方寺開山記』に書かれてあるが、その中に次のような袋中辞世の句が残されてある。

転識得智トハ 代 初春の霞ノ色ヤソレナラン

生涯を清僧で通し、煩惱具足の凡夫であると固く信じていた袋中の臨終正念は、唯識佛教という転識得智、即ち悟りの境地であつたのである。この時、袋中の見た心象風景は春霞に包まれた極楽浄土であつたのであろう。

台掌

袋中上人筆一枚起請文 一幅

當山藏

一枚起請文は承應三年に、當山の第六世にして、山内良什院の開山なる教譽團空上人が裏書せる如く、袋中上人の眞筆なり。而してこの起請文は宗祖の極意、一宗肝要の文なるを以て、頗る謹嚴なる筆致を以て書寫し居らるゝ處、一層の敬虔さを覺ゆるなり、舊くは両手印以下の女を書せざりしこと、この書幅にても知らるゝなり。

唐一我朝一乃智者于此沙汰一ト一觀念一之方一又學文
 一之方一乃修一念佛一之方一往生極樂乃方一乃其乃弥陀佛一
 中乃修一往生一之方一思一中外一乃其乃三修一之方一
 此乃修一南无阿弥陀佛一之方一乃其乃修一之方一

はあり奥深きもなほ二尊の修持よくと本願一もいふ念佛を
 ほとんども能一なりは好まざるも一文不知るに託るなりて尼入道をも
 修持せしめて都て振舞ふなりて一念佛とて

連載『梵字』⑥

塔婆の梵字の

意味するもの(1)

人間とバツクの仏(続)

真野龍海



〔塔婆の表の面の書き方〕

塔婆の表の第二番目の力(ha)は、風を表す梵字です。力(ha)には、第一番目のキヤのように言葉としての意味はありません。しかし、この力は風を表す梵字とされています。日本の梵字の伝統では、先回も申し上げましたように、(ha) はハと読まないで、カと読んでいます。ハは^カに発音しています。

さて、力(ha)は『梵字』④の時のキリク(kiri)の中にありました。その書き方は、先ず、①の「ア点」をうつて右方へ引き②で筆を入れ直して、左下③の方に曲げ下ろし、跳ね上げて下ろし、④と下げ斜め右下へ筆を上げながら放す。

「ア点」について説明します。梵字の筆法では原則として第一筆は、一点をア点といつて、第二筆が上に重なって見えなくなるとしても、その一筆を作法として、書いてから以下の筆を進めます。字によつては、その第一筆があるとずつと梵字

らしく形が整うものがあります。ここの
 キヤ・カ・ラ・ヴァ・アはみなそうで
 す。

この第一筆の一点のことを「ア点」と
 いうのは、梵字のアルファベットは最初
 の「ア」から始まります、いわば「い
 ろは」の「い」に相当する初めの、書き
 始めの、一筆という事から来ているので
 はないでしょうか。

梵字には、お経により、一字一字に字
 義といつて、一字毎に、その字を含んだ
 単語を立てて、意味づけが行われていま

塔婆の表(一)
 毛筆書き



す。その中には仏教用語があつて、梵字を習いながら、仏教も知らず知らず学べるような工夫があると、私には思えます。これは、『金剛頂経』『大日経』等のお経の中の「五十字門」によつています。

例えば、「イ」(𑖦)は、「根」(インドリヤ、Indriya、感覚器官)の(𑖦)、「ウ」(𑖨)は「譬喩」(ウパマー、upama)のウ(𑖦)、「ハ」(𑖛)は「因縁」の「因」(𑖦)の(𑖦)といったように、大切な仏教用語の文字を引き当てながら、それぞれの文字の字義がきめられていきます。私が思うに、その説明もしながら、無味乾燥な梵字の習得をさせていった工夫でしょう。その中には仏教用語として大切な言葉も多く入っているからです。

さて、「ア」(𑖡)は、「不」「無」「非」という否定の意味がありますから、仏教用語には多くあります。仏教のものの見方は、ものすべて、いつ発生したか消滅したかを越えた絶対の存在である、というものです。その生滅を超えた、絶した、

表現を超越した、という場合に、仏教は「不」という言葉を使います。その一つとして、真理、実相に対して、「本不生」(ア(不)ーウトバンナ(生))という「ア」を使つた表現があると思います。

なにもまして、この梵字を重要として尊重する真言宗系統の教えでは、言葉そのものを真理として、大切に扱われます。いの一番というべき、アルファベットのトップである「ア」(𑖡)の字の第一筆に対して、宗教的、哲学意味も含め、慎重に梵字を書き進むこととされます。特に「ア」(𑖡)は大日如来を表す種子として、すべての根元ともいえます。この心構えは梵字の作法でもあります。法要儀式に用いる信仰の対象ともなる梵字にはこの「ア点」を先ず一筆してから、一筆一筆心したいものであります。梵字の基本的作法と言えましょう。

なお、この力(𑖡)は、仏や菩薩を表す文字、種子として、地藏菩薩を表すので、地藏尊を本尊とするお寺や霊場で、

御朱印帖に書かれますから、英語の筆記体の「E」と覚えておくとか覚えやすく、気がつきやすく、有り難みも格別でしょう。

次の第三番目のラ(𑖢)は、火を表す梵字です。この字も、ラ(𑖢)自体には意味はありませんが、火を表す文字です。その文字の下半分は、図で示しますように、キリクの字を書くときは、この下半分を切り取つて力の下に継ぎ、さらに、「𑖢」が着いて、それでhrīḥ、キリークとなります。ラ(𑖢)の書き方は①ア点の後、②で折り返して、筆を戻して、③中央から下へ折り返して、そのまま右下方にて筆を上げつつ放す。

この字の下半分は、前に、キリクを書くときに説明したように、点線内の部分は切り取られて、キリクの下部に継がれて書かれている。そういう意味で、このように梵字の一部を取つて、他の梵字に継ぐことを切り接ぎと言つていきます。

愛

心象書道

永井健策

文字って面白いものですね。

ちょっとした加減で、色々な形になるのですから。

たとえば愛と言う字を考える。

形が変われば愛の意味も違って来るんですね。

この愛はお母さんの大きな愛。

愛の大きさが皆様の心に伝わりますでしょうか。

今後とも新しい意味世界を、見出し続けるつもりでおります。

一年間、本当に有難うございました。

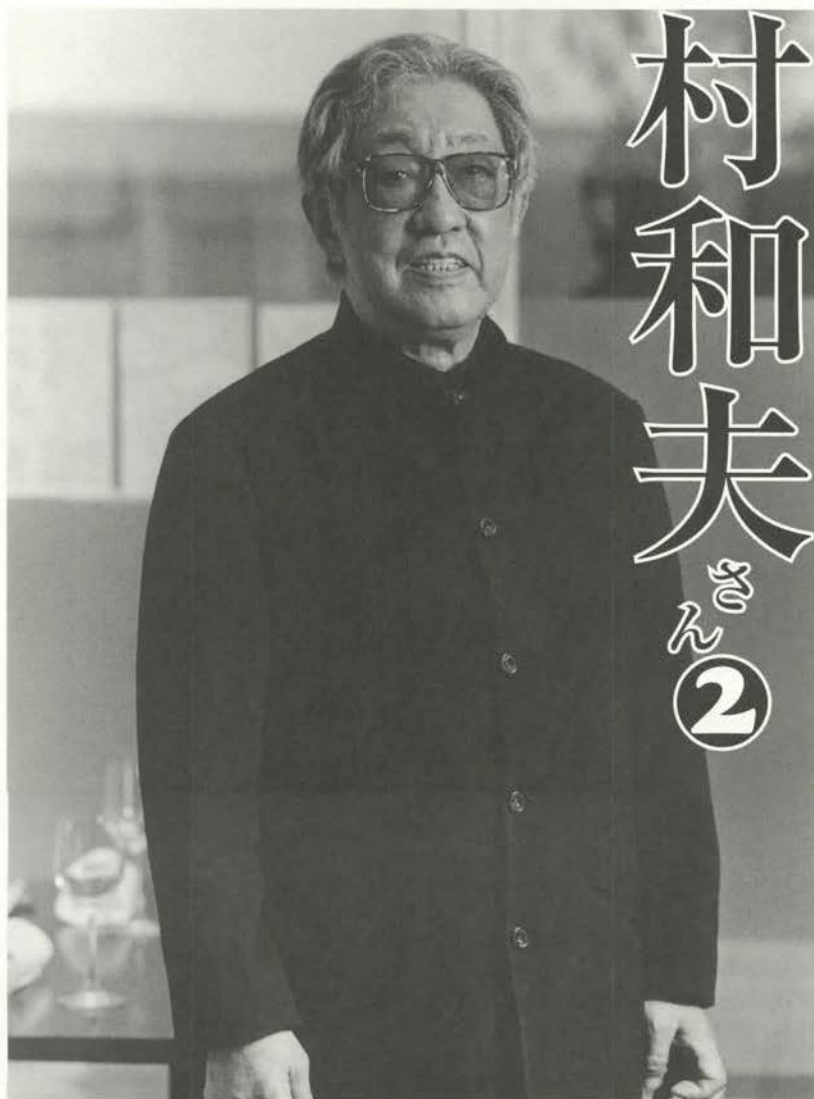
(ながいけんさく)

昭和20年群馬県生まれ。中央大学法学部卒業後、読売広告社に入社。企画セクションに配属され16年在籍した後、自動販売機製造メーカーのサンデンに転職。販売企画の仕事を16年続け、平成11年に独立。会社を設立し、新規事業に取り組んでいる。趣味で始めた「心象書道」が趣味の世界を超え、展覧会を開くまでになっている。

連載

会いたい人
関 容子

北
村
和
夫
さん
②



撮影/タカオカ邦彦

磊落で男っぽい北村さんが、ちよつと意外なことを口にした。

「ぼくは依頼心が強いからね。あまりにいい女たちと出会ったせいかも知れない……」

いい女、というのはもちろん杉村春子のことだが、複数となると誰だろうと思ったら、コーちゃん（越路吹雪）とキワ子（太地喜和子）だそう。

「コーちゃんとは『モルガンお雪』のテレビ版で共演したのが最初だったかな。モルガンの役はピンボー・ダナオで、ぼくはお雪の恋人だった三高の学生の役。その後、ラジオドラマでやたらに共演する機会があつて、すっかり意気投合したんだね。それで第一回訪公演に文学座が『女の一生』で参加したとき、ぼくはろくにお金もない中で、おみやげにハンコを彫らせて、高麗屋（八代目幸四郎）白鸚（とコーちゃんの二人に持って帰って来たんです」

文学座は昭和三十二年八月、はじめて歌舞伎と新劇の合同公演『明智光秀』（福田恒存

作）を上演し、先代の幸四郎一門と共演した。

「光秀が高麗屋で、芥川比呂志が信長。本能寺の変の場で今の幸四郎さんがまだ染五郎のころに森蘭丸で出てた。ぼくは加藤清正で三言しか台詞がないから、その他の役も色々やらされて、本能寺では敵兵で（森）蘭丸に槍を突きつけながら、早稲田受けるんだって？ 難しいよ。こんなことやつてると受からないよ、つて、一応早稲田の先輩としてからかうと、染五郎がソツポ向いて笑いをこらえるの（笑）。高麗屋御夫妻には赤坂のマンションに招かれて、よく御馳走になったりしたので、それでまあおみやげハンコをと……」

そのハンコのおみやげの話には私の予備知識があつた。予算の関係で高麗屋には「松本」と姓だけ、コーちゃんには愛をこめて姓名舊発したが、出来上りが「越路吹雪（よろふく）」になっていたとか……。

「どうせ加藤武あたりから聞いたんでしようが、高麗屋のもちゃんと姓名彫らせました。でも歌舞伎役者に姓名というのは野暮で、幸

コーちゃんこと越路吹雪と



演されたときのこと。北村さんの和藤内役を
その後の東京公演で私も観ている。

「大阪に来てるんなら、わたしは神戸でリサイタルやってるから来ない？」と言われて、とても会場へは無理だけど、じゃあ終演後に行くわ、と言って、波止場近くのキングスアームスという店へ、ずいぶん時間かかったけど行きましたよ。外国の水兵がくるような店で、正面にはチャーチルの写真が飾ってあって、その下にイギリス人らしい夫婦が座ってたりする。やがてサングラスかけてスカーフをしたコーちゃんが、楽団の人たちと一緒に入って来たんで、ビールで乾杯したあと、何か一曲でいいから歌ってよ、と言って、ダメダメもう声が出ないわよ、って。そしたらピアノを弾き出したのを見て、見たら中村八大だった。『愛の讃歌』するとコーちゃんが歌い出して……これがよかった！ 声はすっかりかすてんだけど、あんな味のある歌って聴いたことなかったね。日本語で歌ってる

のに、フランスのエスプリがじかに伝わってくる。すごい歌い手だった。あんなに歌がうまいのに、ものすごく羞恥心の強い人で、あれ、内藤法実と結婚したからよかったんだと思う。他の男じゃダメだったね。でも、コーちゃん早死にしちゃったでしょ。亡くなった晩に杉村さんからぼくに電話があつて、しみじみ言っていましたよ。また日本からいい女が一人、いなくなっちゃったわねえ……って」

もう一人のいなくなつたいい女、太地喜和子が文学座に入ってきたのは、昭和四十二年のことだった。

「研究生の試験を受けに来たときから、並の女じゃなかったね。待つてるときも始終足を組み直したり、キョロキョロ落着きがなかったり。ぼくらと目が合うと照れ笑いをするんだけど、それがまたひどく三枚目。おい、面白そうな子がいるぜ、って、演出家の木村光一を肘で突つくと、うん、いい子だね、あれ、って。ぼくが誰とも指してないのにすぐにわ

かつて、二人揃って合格の二重丸をつけちゃった」

入座してからの太地喜和子はめざましい躍進ぶりだ、『阿Q外伝』（宮本研作）では北村さんの相手役に抜擢された。

「ぼくが阿Qで、恋人の若い飯炊き女ウーマーが彼女の役。終り近くにウーマーが泣くところがあるんだけど、そのときの泣き方がすごかった。あんたが犯人は阿Qじゃないと言いさえしたら、阿Qは銃殺されずにすんだんだ、と人に言われて、ウワーツと、号泣するんですが、これが超号泣。全身全霊で泣いてるんですよ。共演者はみんなもらい泣きして、死体のぼくも思わず涙がこぼれちゃった」

杉村春子は太地喜和子の才能をとてつも評価していたという。

「文学座の公演じゃない芝居で『飢餓海峡』（水上勉作）に出てたとき、ぼくは杉村さんと観に行きましたよ。杉村さんが、よかった、これは喜和子さんのものね、って言いました。喜和子さんのもの、なんて、最大級の褒め言

葉でね、ぼくなんか言われたことがありません。でもやっぱり杉村さんだ。喜和子が、あつ、と言って上を見て静止する芝居を二回、やったんだね。あれはいけないわね、受けたからといって、一回にしておかなければ、って言うてました。さすがだな、と思いましたね」

太地喜和子も杉村春子を敬慕して、何ことも包みかくさず話していた。

「杉村さんが言うてましたよ。勘九郎さんと仲よくなったのはとてもよかった、って。喜和子が歌舞伎を観るようになった、って。歌舞伎の姿形というのは本物だから、修練の結果ああいうものになったんだから、そこから学ぶものは大きいわよ、って言うてました。喜和子の『にぎりえ』のお力の姿形なんて、まったく決ってましたからね」

北村さんの当り役の一つに『花咲くチェリー』（ロバート・ポルト作）のチェリー役がある。その保険会社に勤める初老の男は、無学だが善良で大酒呑み、長年の都会生活に疲



「阿Q正伝」
の阿Q役を演ずる



「ジェルソミーナ」では太地喜和子と共演



れ果て、故郷のサマセットにリンゴ園を営むことだけを夢見ている。しかし現実には悲劇的状況に向うばかり……。昭和四十年、長岡輝子の演出で初演して以来、その後何度も再演された。

「この芝居を喜和子が観に来て、幕が下りて楽屋へ戻ると、息せき切って走ってきた彼女が、ワァーッと叫んでいきなりぼくに抱きついたんですよ。嬉しかったね。出来のよくない芝居のときは、挨拶もせずにプイと帰っちゃう人だからね」

『花咲くチェリー』の女房イゾベル役は、いつの日かは太地喜和子でと思っていたが、それはかなわなかったこととなる。平成四年十月十三日、伊豆の海で事故に遭って水死してしまつたから……。

「朝早く文学座から電話があつて、エーッ、と叫んですぐに切っちゃうほどの動転ぶりでした。気丈な杉村さんもたオロオロするばかりで、その日の舞台は気を張ってつとめましたけど、幕が下りたら杉村さんがドツと泣

き崩れて、ぼくも、ほかのみんなも泣き出しました。杉村さんの後を継ぐのは喜和子だとして、誰でも思っていましたし、それだけの實力を持つ、花のある女優でした。あんなにやりたがっていた『欲望という名の電車』のプランチ役も、もうちょっとでできるところだったのに。できることならぼくも喜和子のプランチでスタンレーをやりたいかったのに、と思つてね」

太地喜和子の告別式は、信濃町の文学座で劇団葬として行われた。

「みんなが、とてもきれいな死に顔だと言つて、最後のお別れをしようかとも思いましたけど、しまいに思はず、いやだつ、と口に出して言つてましたね。喜和子のようないい女には、どこかで生きていてほしい、という思いが強かつたからだと思います。後輩たちはみんなお別れをしてましたけど、杉村さんもうとう喜和子の顔は見ませんでした。多分ぼくと同じ気持ちだったんだろう、と思いますよ」

手をかざして癒す

「ヒーリング」

前回は、手でもって施術する手技療法から「オステオパシー」というアメリカの療法を紹介しましたが、手というのはきわめて不思議な力を持っているもので、これは誰しも経験があると思いますが、たとえばお腹が痛いとか膝小僧を擦りむいたなどという場合、その部位に手を当ててもらおうと痛みが薄らぎます。「手当て」ということは、こういうところからきたのではないかと思うのですが……いや、こんな話から始めていいのか、じつは書きながら逡巡しています。

というのも、今回お話ししたいのは、施術者が患者に手をかざすことで癒す、いわゆる「手かざし療法」だからで、種々ある代替医療の中でこれほど理解されにくいものはないと思うからです。

CAMUNET／代替医療利用者ネットワーク

井上朝雄

患者のからだに手を触れるか触れずに行うかは、それぞれの療法によって考え方がありますが、いずれにせよ、手から発せられると思われる何らかのエネルギーによって病んでいる人を癒すという、この手かざし療法は、記録によれば五千年前にさかのぼり、エジプト、バビロニア、ギリシャ、インド、チベット中国をはじめ各地に残されているといえます。また、旧約・新約を通じてユダヤ・キリスト教の聖典にも手かざしの記録が多く見られるようですが（ぼく自身は読んでいないので、曖昧な言い方しかできませんが）、今日、その力が「代替療法」として見直されてきていることはたしかなのです。

いくつか例を挙げると、イギリスの「スピリチュアル・ヒーリング」、中国の「外氣功」、アメリカの「セラ

ビューティック・タッチ」などがあります。

このうち「スピリチュアル・ヒーリング」は、キリスト教由来の癒しのわざで、こうした手かざし療法は英語で「ハンド・ヒーリング」あるいは単純に「ヒーリング」といい、施術する者を「ヒーラー」（癒し手）といいます。イギリスにおいてはホピュラーな代替医療の一つとして国民保険であるNHS（国民ヘルスサービス）の対象にもなり、医師の同意さえあれば病院やクリニックでヒーラーが施術を行ってよいことにもなっています。

中国の「外気功」は、氣功師と呼ばれる専門家が、患者に対して「氣」を送り、患者の「氣」の流れを調整することによって病を治すわざですが、いま中国で医療としてこれを行うことができるのは——いろいろあつて——西洋医学か中国医学の医科大学で学んだ人に限られています。

アメリカの「セラピューティック・タッチ」については、カムネットとして創始者のドロレス・クリーガーというおばあちゃんを四年前に招きました。おばあちゃんといつてもただ者ではありません。ニューヨーク大学の看護学の名誉教授で、看護という仕事が「人を助けたい、癒したいという願望、患者への切実な共感、病む人、苦しむ人に対する強い無私の感情」にあると考えて癒しの

技法を模索、友人の「特異な力を持つヒーラーたちの力を借りて、『宗教的な背景を持たない』誰にでもできる手かざし療法の科学的な研究を始め、『セラピューティック・タッチ』を創出、その研究結果によってニューヨーク大学大学院で「看護のフロンティア」というプログラムが始まり、いまでは全米の看護婦の十五パーセント以上が病院やクリニックでこの癒しの技法を用いているといわれています。

最初に導入に積極的だったのはICCU（集中治療室）や救急救命センターの看護婦やホスピスワーカーで、セラピューティック・タッチによって苦痛が緩和され、不安が取り除かれ、ときには劇的な治癒や回復が生じたといえます。

日本発の手かざし療法もあります。世界的に有名なのは「レイキ」であり、いまイギリスで名をあげつつあるのが「ジョウレイ」です。ひよつとしたら日本の仏教にも同様な技法があるのではないか。浅学にしてよく自身は知りませんが、あればぜひ教えていただきたいものだと思います。というのも、手かざし療法は、人間のもっともプリミティブな癒しの技法ではないかと思うからです。

足なえ、腰いたる者の、遠き道を歩まんと思わんに、叶わねば船車にのりてやすくゆく事、これわが力にあらず、乗物の力なれば他力なり。

【往生浄土用心】

足腰の弱っている人が、遠い道のりを歩いていこうと思ってもそれはかないません。そこで船や車に乗って勞せずして行くならば、それはその人の力ではなく、乗り物の力によるのですから、これを他力というのです。

他力——「誰もが」のために

毎年、プロ野球の盛り上がりは大変なものである。今年は特に、シーズン早々から「久方ぶりの優勝」をちらつかせ、そのとおり栄冠を手にしたチームのお陰で、「異常」といえるほどの加熱ぶりを見せた。日本プロ野球界にもファンにも、大きな刺激を与えてくれたシーズンではあった。

さて、今年もそうだったが、ペナントレースも後半から終盤となり、優勝をかけた上位チームの一戦一戦に重みが増してくるようになると、「自力・他力」の言葉をテレビやラジオで耳にするようになる。

——なんとか二位にしがみついていた□□ですが、今日のこの大事な一戦に負けたことによって、自力優勝の望みはなくなりました。あとはトップを走る××が残り○試合のうち△試合を落とすという、まさに奇跡的な他力を頼むほかはない状況となりました！

アナウンサーの解説はもはや定型句のようになっている。

「自力・他力」はごく一般化して使われているが、どちらも仏教語であることは案外知られていないようだ。自ら修行を重ね、智慧を磨いて「さとり」に至ろうとするのが「自力」の仏教、阿弥陀仏の大慈悲の力によって極楽浄土へ救

い貰っていただき、その膝元で修行し、同様の境地を目指すのが「他力」の仏教である。「さとり」という目的地に向かう「道程」によって仏教を大別した、それがこの二つの言葉の意味するところである。(アナウンサー諸氏の先のような用例に、「自力・他力」の言葉を広めてくれているという恩恵は認めるとしても、二つの言葉のそうした使われ方が当を得ているかどうか、という点に、とりあえず疑問を投げかけてだけはおこう。)

さとり――。「いかなることにしても執われず、のびのびと、安楽な中に人生を歩めるようになること」と言い換えてもよいだろう。これが仏教における目的地だ。そして、その目的地には「誰もが」行き着いてほしい、というのが根本の立場、諸仏共通の願いである。決して、行ける者だけが行けばよい、というのではない。ここが重要だ。そのため、仏教にはさまざまな道程(修行)が用意されていたが、そのいずれによっても難しい、という声があがった。

その「声」を大にして唱えたのが法然上人である。自分自身を、人間というもの、真正面から見据え続けた結果の「叫び」であった。

それまでも、「どの修行によっても、自分には無理かもしれない……」と思

う者はあった。うすうす気づいてはいた。しかし、それを表に出して言うことは仏教を否定することになりかねない、いや、そんなことより、この自分を否定することにはしないか、「弱き者よ」と蔑まれはしないか、といった心配ばかりが先行していた。だから、念仏を称えれば阿弥陀仏が極楽へ導いてくれる、という他力の教えを知ってはいても、あるいは実践してはいても、どこかで「自力こそが本来、他力は劣る教え」といった見方が払拭できないでいた。そうではない、と上人は言った。

「誰もが」というのが仏の願いであり、そのために阿弥陀仏という仏が自ら用意してくださった他力の教え。それと自力の教えとの間に優劣などつけることができようか、むしろ、「誰もが」を全うすることの難しい自力の教えより、それが完遂できる他力の教えのほうが勝れているのではないかと。

自分の足で歩いていくのか、乗り物に連れて行ってもらうのか。

いずれを選択するかは個人に委ねられている。しかし、よくよく省みれば、「足なえ、腰いたる」自分であることに気づけはしないだろうか。

選択肢は一つ、である。

(小村 正孝)

法然上人を
めぐる人々

一の谷序章

◆第三回◆

石丸晶子

絵・石川忠夫



(七)

朗詠を終えた彼は、やがて傍らにいた何人かの一門の若君たちに都の思い出を語り、今後の一門のゆく末を、あれこれと語りはじめた。

「殿上での管弦の催し、歌会や蹴まりの集い、内裏や院御所に伺候したり、宿直とくいしたりした日々のことなど、今となつては、あれは夢まぼろしであつたと思へません。しかし、その中で唯一つ、たしかなものとして思い出されるのがあります」

横笛を手にもつて二十一歳の若者はそういつた。

「おお、その唯一つたしかなものとは何でございます。何でありましょうな」

清経のことばを傍らできいていた弟の師盛が尋ねた。

「東山の庵に住む法然上人をそなたは覚えておられようかの。み仏への御信心深くおわしました父上（重盛）が、二度ばかり小松の屋敷に上人を招かれて、お上人が説く念仏の教えを聴聞されたことがあつたが」

「——そういうえげそんなことがございましたな。わたくしはまだ幼うございましたが、兄上のおことばに、あのときのお上人の姿が心に甦よみがへつてまいりました」

重盛がその邸小松邸で法然上人から浄土の教えを聴聞したのは、上人が回心体験をへてまもないころ。法然は四十代の後半であつた。働きざかりといえは働きざかり。誰によつても人はまっさかりの年代である。

その力と輝きにみちた法然の姿が、今、師盛の胸に、遠い記憶の中から甦よみがへつてきた。その昔をなつかしむ思いの中で師盛は、

「それにいたしましても、西海に赴いて以来

わたくしなど思い出すことといえば華やかなりし日のことばかりでございましたに、法然上人を思い出されるとは、兄上はお心が深くございます」

「今、この清経は都に帰りとうてならぬ。わかるか、師盛、われらのこの心が」

「都に帰りたいのは兄上だけではありますまい。一門いずれの方々もみな、都に帰りたい心に変りはありません」

「いや、師盛、われらはな」と清経は夜の海の彼方に視線を注いで、

「もとの栄華に戻りとうて都に帰りたいのではないのだ」

そういうと清経はことばを切った。船べりを洗う波の音だけが、話し合う二人の兄弟の上に落ちていった。

しばし、二人はその波の音をきくともなしにきいていたが、やがて清経は、

「太宰府では修理殿が、都に残してきた恋しい女おんなに逢いたいというお歌をお詠みなされたが、われらが都に帰りたいのは、残してきた女おんなに逢うためでもない」

(八)

「もとの栄華に戻りたいためでも、恋しい女おんなに逢うためでもないとすれば、では兄上は、何のために都にお戻りになりたいのでございます」

「われらはな、師盛」

そういうと、清経は闇の中で目を閉じ、しばし黙っていたが、やがて、

「今一度法然上人にお会いして、そのみ教えを聴き、み姿を仰ぎたいのだ」

「……」はっとして師盛は闇の中に清経の顔をふり返った。

突然、何かある真剣なもの、尊く真面目な

ものが、ぐさりと心に突きつけられた思いである。

「み教えを聴いてどうなさるおつもりでございます」

やっとの思いで師盛は訊ねた。声が乾いていた。「兄上は法然上人に会われて、御出家でもしたいとお思いか」

「そこまではわからぬ。今はただ、お上人にお会い申したい、その心だけよ」

清経は呟くようにそういうと、

「善業を積む家は子孫にまで幸せが及び、悪業を積む家は子孫にまで禍いが及ぶと聞いているが、今のこの不運、われらが先祖はいかなる悪業をなされたのであろう」清経はうめいた。

「……」

夜の闇の中に沈黙のときが流れた。遠く赤間ヶ関のあたりであらう、漁師らのたく漁火

が闇の中にまたたいている。

しばらくして師盛は、

「兄上、あまり思いつめなさいますな。われらは、平家一門の先祖が悪業を積んだとは思いません。一門のあいだから、われらは御国母建礼門院さまと、帝（安德帝）をお出ししております」

「おお、しかし、都落ちして以来、今日までの日々はどうだ。心落着く陸の住み家とてなく、たえず源氏の襲来に脅かされては逃げゆく暮らしではないか」

「……」

「このようなわれらも、み仏はお救いくださるであらうか。今、われらが心を占めておるのはこのことよ」

清経はそういうと、しかと弟のほうを見つめて、

「覚えておられるか、師盛」



といった。

「何をでございます」

「父上が法然上人を屋敷に招かれたときのことだ。そのときのお上人のことばを覚えておるか」

「たしか、なむあみだ仏のお話でございます。たな。法然上人といえ、専修念仏の教えで、都でも名高うございました」

「それよ。十悪五逆、いかなる罪びとといえども、まごころから罪を悔い、なむあみだ仏を称えてみだ仏の助けを祈れば、必ず、必ず、来迎し給うとお教えではなかったか」

九

「兄上がお上人のお名を口にされてから、わたくしの心にもお上人の姿が甦ってきておりました。まだわたくしは幼うございましたが、上人のみ姿が甦るとは、よほど強い印象をあ

のとき、子供ながらに抱いたのでありましよう。お教えくださいましたことも思い出します」

師盛はことばを切ると、強い語調で、そして一語一語たしかめるように、

「たしかに、兄上の仰せのようにお教えになりました。念仏往生の力強いみ教えでございました」

「尊いみ姿であつた。今、しきりにお上人のみ姿が思い出される。あのときのみ声も耳にひびいてくるようだ」

「ならばお嘆きなさいますな。兄上、お上人のみ教えを信じて、われらも必ずみ仏の救いにあずかりましょうぞ」

「お上人はお教えであつた。いかなる罪人、悪人といえども、まごころから悔いて、念仏すれば必ず浄土に迎えられると」清経はくり返した。

「信じます。お上人のみ教えを」

「師盛」

清経は弟の名を呼んだ。

「われらはもう疲れ果てた。去年の秋以来、陸を追われて海に漂い、どこゆくあてとてない旅の空じゃ。もうこのまま、一心に念仏して、浄土にいつてしまいたいと思う」

「何をまたお心の弱いことを仰せられます、兄上」

はっとして師盛は、兄の顔をひたと見つめていった。

「継義の裏切りに出会ったとはいえ、西国にはまだまだ平家に心を寄せる武士たちは多うございます。継義などはたしかに神仏の罰をうけましょう。頼朝の軍勢とはまだ戦さもしておりませぬ。源氏に打ち勝って、われらが家運も開けると、なぜ兄上はお考えになりませぬ」

「それは夢ではないか、師盛。今の一門をみてみよ。この柳ヶ浦に漂い着いても、土地は狭うて主上の御殿さえ造れぬ有様。そしてここさえ、源氏が襲うて来たら、われらは一体どこに逃げるといふのか」

「早まられますな、兄上。お上人のみ教えを信じ、お念仏の力に縋って、生き延びることを考えようではありませんか。生き延びることを考えてこそ、平家の家運も開けるといふものでございます」

しかし、この師盛のことは、もう清経には聞こえないようであった。彼は横笛を持つたまま、両手を合わせ、一心に念仏を称えはじめていた。

と、あつという間の出来事であった。屋形船から身をおどらせるようにして、笛とともに手を組み合わせた清経のからだは、海中に沈んでいった。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

● 触

〈特選〉

触診の女医の指先撓やかに

佐藤 雅子

患部のあたりに手を当てて診察してゆく。

この頃は機器に頼ることが多くなつたが、触診や打診は、何となく病者を安心させるところがある。女医のしなやかな手が、問診のやさしさを感じさせる。

〈佳作〉

みどり児に触れんばかりの秋の蝶

中島富士子

食パンの感触抱いて秋の坂

富田 筆子

触診の脈びこびこと秋深し

井村 善也

● 板

〈特選〉

まな板のへこみに並ぶさんま鮓

佐藤 まり

姿鮓だろう。開いて酸でしめたさんまを、長く伸ばした飯にかぶせ、幾つかに切ると、押しずし風の出来上がりである。頭がはみ出

して、いかにもうまそうである。まな板の使
い古したのがよい。

〈佳作〉

登りつめ黒板塀の薦紅葉

河合富美枝

溝板や小菊に朝の水をまぐ

清水 みね

板塀の続く寺領や秋彼岸

谷 しげ子

●自由題

〈特選〉

早ばやと掘りたる諸の鍬の傷

浦田 ちる

掘るのには少し早いがと思いながら、鍬を
持つて畑に出る。諸はもう掘り頃に近づいて
いたのだろうか。一つを鍬で傷つけてしまっ
たが、それがゆつくり待てずに出かけたとい
う、心のはずみを伝える。

〈佳作〉

古寺の蓮の実飛びししじまかな

金谷 友江

まねごとの庭木の手入れ秋暑し

西井 正

息つめて見入る児ふたり蟬の穴

増田 信子



参加作品 編集部選

触

苔むせし石仏に触れ螢の寺

金谷 友江

冬の陽の嬰兒にそつと触れてみる

山本美代子

触れ合ひを深む一泊秋の旅

細田 初枝

肩に触れ手に触れ木の実時雨かな

河合富美枝

書を読みて心触れ合う文字と人

今井 恵子

コスモスに触れずに行きぬ下校の子浜口

佳春

板

板の間に団樂ありて振り炬燵

今井 恵子

板張りの回廊巡る秋の旅

佐藤 雅子

古寺の板戸二枚やもみじ散る

金谷 友江

浄土誌上句会のお知らせ

締切・十二月二十日

発表・『浄土』二〇〇四年一月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

●葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

名利の板戸に残る紋所

中島 一子

張板に祖母の思ひ出秋の暮

細田 初枝

沿線の紅葉だよりの掲示板

中島富士子

板の間に絨繖敷きて冬となる

山本美代子

板塀のへのへのもへじ小鳥来る

片桐てい女

自由題

龍は淵に石工は石工小屋に寝ぬ

片桐てい女

あざさみのなほも隠して終の埒

嶋田喜代子

美しく仆れたきもの花茗荷

山本美代子

背負ふものまた増えにけり神の留守

中島富士子

山の宮幟はためく秋祭り

中島 一子

身に沁むや長押に古りし感謝状

細田 初枝

秋時雨色を残して過ぎにけり

金谷 友江

秋海棠人目のびしこと遠く

清水 みね

団果の児の手に遊ぶひとつかな

佐藤 雅子

長き夜のハーブの音色いづこより

河合富美枝

月明かり家路に急ぐ影二つ

今井 恵子

空っぱのバス秋風を乗せてゆく

谷 しげ子

検診を終えて安堵の秋の暮

東 保

自由題 光盤

※季語ではありません



さっちゃんね

⑥ かい日

かまち♡よいろう



編集後記

白き月静かなる朝暮の秋

岱潤

この秋熊野三社をお参りした。カラス文字で知られる護符や、神武天皇東征のときに、熊野から大和まで道案内した八咫鳥など、古代神話の世界に誘われた。しかし此処は、法然上人御在世のとき、蟻の熊野詣でと言われるほどブームをよび、時の天皇の後白河天皇は三三回、後鳥羽天皇は二九回も、四百キロ離れた京都より行幸を行っている。これはこの熊野三社が阿弥陀信仰のふるさととされ、熊野は死者の世界、カラスは死者の霊の化現とされたことによるからだと思われる。

何年間か前首相の「日本は神の国」発言があったりしたが、平安時代、法然上

人の出現から、この国の人々の信仰の根底には浄土信仰が息づき、来世に対する願望の強さを感じ取ることができるような気がした。

また南インドを故郷とする観世音菩薩の信仰は、京都の南に位置することから、熊野の二社那智大社の那智山を観音霊場の一番とし、浜の補陀洛山寺より、小さな船に乗っての入水で知られる補陀洛渡海をする人々が多く出たことなど、日本人の信仰形態では珍しいほど刺激的だ。日本国建国や神様への信仰よりも、自らも浄土往生を願う強い信仰を感じ取ることができる。その信仰においては天皇も庶民も皆一様な気がする。それこそが日本人の信仰であろう。(長)

雑誌『浄土』
特別会員、維持会員の方々

巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大田秀三(大本山清浄華院)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光円寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮真(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
塚田弘導(平塚・晴雲寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村眞道(仙台・愚鈍院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
真野龍海(芝・天光院)
宮林昭彦(大本山光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)

敬称略・五十音順

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

浄土

六十九巻十一月号 頒価六百元

年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十五年 十月二十日

発行 平成十五年 十一月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三七八)六九四七

FAX 〇三(三三七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

編集顧問

大室了皓

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤光道

佐山哲郎

村田洋一



昭和36年10月号



昭和36年11月号



昭和36年12月号



昭和37年1月号



昭和37年2月号



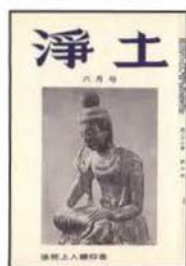
昭和37年3月号



昭和37年4月号



昭和37年5月号



昭和37年6月号



昭和37年7月号



昭和37年8月号



昭和37年9月号



昭和37年10月号



昭和37年11月号



昭和37年12月号



昭和38年1月号

法然上人鑽仰会の

本



『念仏讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法 47 × 59 cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円



『差出人は法然さん』
600円

月刊『浄土』
バックナンバー



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット) 800円



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円



『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会
電話／03-3578-6947
FAX／03-3578-7036